

平成30年（2018年）のアユ資源調査結果概要

久米弘人・西森克浩・大山明彦・田中秀具・亀甲武志

1. 目的

アユの資源水準や成育状況を評価するため、魚群調査、産卵状況調査、ヒウオ生息状況調査および成育状況調査を実施した。

2. 方法

魚群調査では、1月から8月まで毎月1回、北湖の水深30m等深線付近の定線調査コース上に出現する魚群数を観測した。

産卵状況調査では、8月から11月にかけて7回、北湖に流入する11河川の産卵場においてアユの産卵量を調査した。

ヒウオ生息状況調査では、10月から12月まで毎月1回、北湖において網口1m×2mの角形幼生網による1,000mの水平曳きを18回行い1曳網あたりのヒウオ採集尾数を求めた。

成育状況調査では、エリとヤナの漁獲標本を収集し、体長等を測定した。

3. 結果

魚群数は平年の2~44%で推移した(図1)。産卵量は12.8億粒で平年の約13%であった(図2)。ヒウオ生息密度は平年の41~254%で推移した(図3)。漁獲魚の平均体長は、エリ、ヤナとも漁期を通してほぼ平年並みで推移した(図4)。産卵調査結果は、河川の増水で調査区域の一部でしか調査できなかった河川もあり、ヒウオ生息密度の結果等から過小評価と判断した(結果の詳細は資料編参照)。

これらの調査結果は水産試験場ホームページに掲載し、漁業関係者等へ情報提供した。

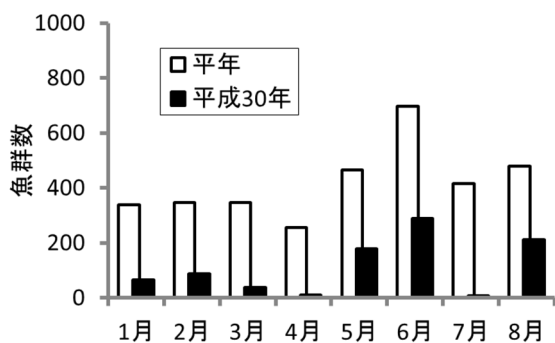


図1 魚群数の推移

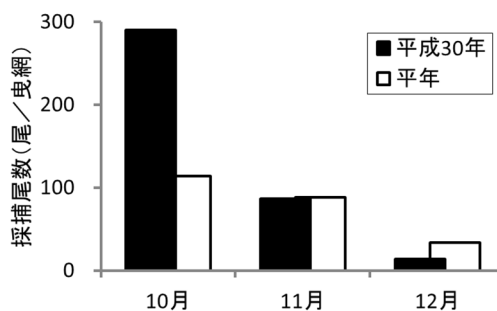


図3 ヒウオ生息密度

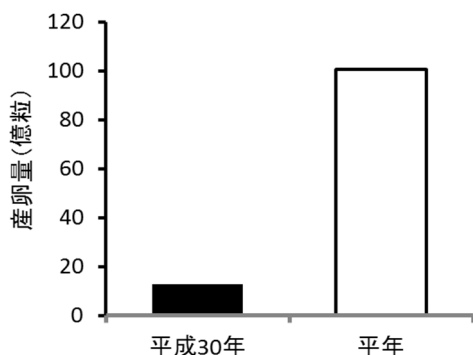


図2 天然河川における産卵量

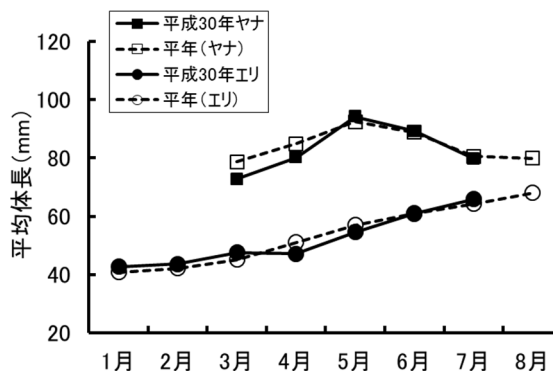


図4 エリヤナ漁獲魚の平均体長

平年とは過去10年から最大最小値および欠測年を除いた平均値